

開かれた都市住宅へ

木造住宅密集地域における内部空間と外部空間の関係の観察をもとに

曾我部昌史研究室 佃 直希

研究概要

東京都における代表的な木造住宅密集地域を中心に、住宅内部と路地や専用庭との連続性、自然発生的に起きた住民による緑化や屋外での生活行為、私物の溢れ出しの観察を行い、そこにみられる内部空間と外部空間の関係をもとに、プライバシーを保ちながらも、街に住んでいる共存関係や連続感を実感することのできる住居及び周辺環境を計画した。

研究目的

公共空間とプライベートな空間が連続性をもつことによって、地域や都市への帰属意識、街に住んでいる共存関係や連続感を実感し、住人が都市に集まって住むことをポジティブに捉えられるような空間構成を探る。

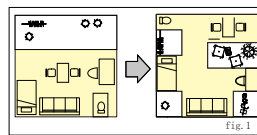
研究成果

木造住宅密集地域の観察



設計手法

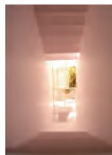
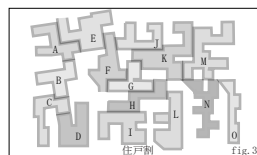
外壁の複雑化



狭い敷地から無理やり広くまとった内部空間を獲得しようとするのではなく、外壁を複雑化して住宅内に外部空間を取り込み、小さいながらも光や風を感じられる快適な空間をつくる。(fig.1)



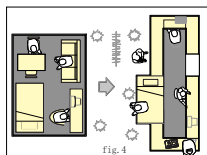
ひとつの住戸が、川辺、中庭、路地等性質の異なる多様な外部空間と接続することで広がりをもつ。また、それぞれの外部空間に出入り口を設けることで、圧迫感を軽減している。(fig.2)



細く長く複雑化し枝分かれし伸びた住戸が、複雑に絡み合い狭小ながら奥行きのある空間をつくり出す。(fig.3)

模型、断面図

外壁の家具化

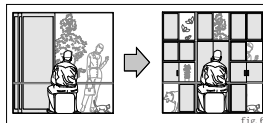


家の外周部が家具となり、行為の中心となることで、内部の行為は外向きに、外部の行為は内向きになり、内と外が関係付けられる。敷地の狭小性を克服しながら、内部には常に窓辺にいる広がりを感じる生活空間ができ、外部には路地を豊かにする気配や行為、モノの溢れ出しが起こる。(fig.4)



外壁で明確に内外を区切ると、行為はその中でのみ完結し狭い室内はより狭くなる。立面は全く更新しない、外壁を家具化することで、活動の中心が外周に移り生活領域が内外へと拡張する。また内外のバランスを住人が細かく調整しながら生活することで、住宅の立面がライブな(更新し続ける)状態になる。(fig.5)

開口部の細分化



狭小な住戸内では窓が眼前に迫り、また手の届く範囲にあるため窓を細分化し、細かく調整できるようにすることで、狭小なスペースだからこそ可能な身体感覚に繊細に対応できる空間をつくる。(fig.6)



敷地 東京都中央区佃一丁目



断面図



全体模型

苦労した点や感想など

都市において自分の住まう場所が、経済原理で決まった切り売りされている箱であることや、より完全な遮蔽性を実現することによってプライバシーを守るという強迫観念じみた感覚をもってしまっていることで、生気のないとても退屈で陰鬱な場になってしまっているように感じました。複雑で多様性をもった外部空間に繊細に開いて複雑に関わり合いながら暮らすことのできる、人間臭く住まえる場所を都市の中につくりたいと思いました。